

Sky Seminar

関西学院大学 スカイセミナー

学内での講義内容を分かりやすくアレンジしたものです。



「人はいかにしてこの言語を習得するか」

人間と言語の根源的な関係を解明しようとする言語学者のみならず、子どもをバイリンガルに育みたいと願う親御さんにとっても、興味をそそる問いではないかと。

私たちは一般に、新たに言語を習得しようするとき、その言語との接触量が多ければ多いほど習得が速くまた効果的に「行われる」と考えます。その言語をできるだけ多く与えるのが最良の方法だといわれています。

多量に言語を与える言語教育の「インテンシブ教育」という形態があります。種々のタイプがありますが、早いものでは幼稚園や小学校・生から社会や算数などの教科を、習得目標の二言語を使って教えるという方法です。教科書と言語習得の両方を同時に進めようとするもので、今から35年ほど前にカナダで開発されました。

nilar papers at core.ac.uk

provided

バイリンガリズム



バイリンガルを育てる 最良の方法とは？ 影響をおよぼす 「言語の力関係」

この教育形態は従来の言語教育では成し遂げることのできなかつた水準の成果をあげ、母語と学業成績のどちらをも犠牲にせずにバイリンガル能力を発達させるものとして、世界各地に急速に普及しました。日本でも1992年、沼津にある私立の学校が日本語を母語とする子どもたちを対象に英語のイマージョン教育を導入し、大きな成果をあげていることが報告されています。

一方、同様の考え方に立つものである社会で少数言語を母語とする子どもたち、例えば、日本在住のラシアル出身の子どもにも、その社会の主流言語、日本語（を習得させるための）、サマツ、インテンシブ教育と呼ばれる形態があります。これは子どもたちを、主流言語を母語とする子どもたちの中に放り込むだけで、その言語を習得させようとするものです。ポルトガル語を母語とする子どもを、日本の通常のクラスに放り込めれば、日本語

との接触量は大きくなり、いずれこれを習得すると考えるのです。しかし、こころはたとえ主流言語の習得が進んでも、引き替えに母語を失うことが少なくなく、バイリンガル能力を発達させるのが困難であることが指摘されています。

同じ考え方に立脚していながら、なぜこのような違いが現れるのでしょうか。第二言語による教育開始年齢、教育期間の長さ、子どもへの母語能力など種々の理由が考えられますが、大きな要因の一つに「言語の力関係」があります。力の強い言語は弱い言語の使用領域を侵食し、これを「駆逐」といって傾向を持っています。言語の力は、その言語を母語とする人たちの政治的・経済的力を反映し、その社会での言語の位置づけを左右します。人々はそれぞれの言語に異なった価値を与え、それが言語の習得に大きな影響を及ぼします。

ですから、新しい言語を習得する際に、単にその言語への接触量が上がれば、バイリンガル能力もそのまま上がっていくと単純に考えることはできません。言語の相対的な力関係で状況も変化します。冒頭の問いへの答えは、実に複雑です。こんな研究課題を含むバイリンガリズムの研究は、日本では端緒を開いたばかりですが、これから大きく伸びる、実に魅力に富んだ学問領域です。



山本 雅代 (やまもと まさよ)

独立大学院言語コミュニケーション文化研究科・言語教育研究センター教授
1952年東京生まれ。獨協大学外国語学部英語学科卒業。ハワイ大学大学院 English as a Second Language 学部・修士課程修了(M.A.)、国際基督教大学大学院教育学研究科・博士後期課程修了(教育学博士)。専門はバイリンガリズム。著書に『バイリンガル』(大修館書店)、『バイリンガルはどのようにして言語を習得するか』(明石書店)、Language Use in Interlingual Families (Multilingual Matters) などがある。